

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649 FAX(03)329915367  
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

音威子府パンフで情勢の総学習を 滝野 忠……………2

朝鮮で行われている経済管理方法……………3

—社会主義分配を正確に実施—

人でありながら「道具」となっていないか……………4

—「子会社は叫ぶ」を読む—

近年の社会主義論書籍から 松尾 匡……………5

『二世紀社会主義への挑戦』／『近代市民社会と高度資本主義

—ドイツ社会思想史研究』／『社会民主主義の源流』／『図

解社会経済学—資本主義とはどのような社会システムか』／

『左翼小児病』はどう読まなければならないか 滝野 忠……………7

総対話と組織拡大基金が焦点……………9

—全労連大会の特徴について—

◇書評

澤野義一氏の新刊『永世中立と非武装平和憲法』を薦める……………11

年間十六万円の賃下げ勧告……………12

読者からのおたより……………13 編集部からのたより……………14

# 旬刊 社会通信

NO. 845

二〇〇二年九月二日号

二〇〇二年九月二日発行  
(毎月一日・二日・二二日三回発行)

## 音威子府パンフで情勢の総学習を

読みかつ考える素材を与えてくれる出版物がない文化と精神、思想状況が闇に包まれているこの時節、「人らしく生きる」とはどういうことを、十六年の重みをもって問いかける素晴らしいパンフレットが発刊された。国労音威子府闘争団が発行したパンフレット『人らしく生きたい 子どもたちの未来のために!』。

なぜか、発売前から評判を呼び、発売以降は、大好評。初刷りは八月二〇日で、発行日までに予約完売。発行日と前後して一刷りと同部数を二刷り、さらに三刷りも考えなければならぬ状況という。このパンフレットを目にした人はまだ少ない。にもかかわらず、すでに一万部を突破。ベスト・セラー、ひよつとすると大ベスト・セラーになる可能性を秘めている。

編集子はゲラの段階でパンフレットを目にする機会を得た。国鉄闘争の機関車としてたかいつづける、音威子府闘争団の十六年という歳月がズッシリ詰まった内容（A4版、三十六頁）に心を打たれた。

表紙の写真が十六年の月日の重さをさりげなく、かつ赤裸々に読む者に問いかける。国鉄分割民営化の一九八七年に誕生したありさ、みいな、えりかの三人の娘たち。カメラに必死で向かい合う誕生間もないあどけない彼女たち。そしてカメラにポーズをとる無邪気な小学校入学時、立派に成長し「お父さん、お母さんには負けないわ。」と意志表示し、語りかけてくれる少女たち。これだけで、「あれから…十五歳の春」をズッシリと心に感じさせる。

このパンフは「人らしく生きよう」の上映運動の広がりの中からつくられた。当初百ヶ所の計画がすでに百六十ヶ所を越え、今年中には二百ヶ所以上になることは確実だ。「人らしく」には国鉄時代を知らない若者たち、国鉄分割民営化は国鉄・国労だけの特別の問題と考え目をそむけていた労働者諸先輩、さらに総首切り時代に直面し、「人らしく生きる」とはどういうことを、生活で教えられたさまざまな層の労働者、市民が、映画とともに国労闘争団、家族、国労組合員の「生」の声を聞いて涙するばかりか、「生きる」ことを考え始めた。

この流れをさらに大きくしよう、労働者は今の社会でどういう存在かを考え、知り、子どもたちの未来のために、いま私たちがなにをなすべきか、「なにがなんでも勝ちたい。私たちの名誉をばん回したい」との思いを、十六年の「重み」をとおし訴えているのが、このパンフレットである。

パンフレットを一読すれば明らかなように、国鉄闘争をたたかいつづける闘争団員・家族は特別の人たちではない。あなたそのものである。「好んで」たたかいつづけているのではないことは、はじめにの「家族からの訴え」、音威子府闘争団の「ゆかいな仲間たち」は教えてくれる。

南では四国の共闘の仲間たちが国労闘争団を援助しようとして、「人らしく生きる」タオルをほぼ同時期に発売した。北からはパンフ、南からはタオルで、この十六年、闘争団・家族が流しつづけた血涙を、嬉し涙にかえようではないか。

（滝野 忠）

## 朝鮮で行われている経済管理方法

社会主義分配を正確に実施

平壤駐在の本紙記者が最近伝えたところによると、朝鮮で経済管理方法を改善するための一連の対策が講じられている。七月一日からは、給与と物価が引き上げられた。現在、朝鮮で行われている一連の経済管理の改善策についてまとめた。

**炭鉱夫は六千ウォン** まず、給与だが、生産労働者の場合、基本賃金は一一〇ウォンから二〇〇〇ウォンと、約一八倍あがった。とくに上昇したのは炭鉱労働者で基本賃金は六〇〇ウォン。国の経済発展に対する貢献度が高く、重労働であるほど、賃金は高くなる。人一倍仕事をし多く稼いだ人は、その分分配を受ける。逆に、あまり働かず少く稼いだ人はその分分配も少なくなる。「社会主義分配原則の正しい実施」だと平壤特派員は伝えている。

**物価、給与のいっせい引き上げ、国家負担から「実勢価格」へ** 一方、物価はどうか。コメの場合、これまで一キログラム当たり八千ウォン（ウォンは一〇〇ウォン）だったのが四四ウォンと、一気に五五〇倍に上がった。平壤市内を走るバスの運賃は一〇ウォンから二ウォンになった。新しい価格の設定は、基本食糧であるコメの値段を基準に行われている。

住宅費、光熱費、水道代なども自己負担となるが、無料教育制度、無償治療などの社会的施策はより強化した形で続けられる。

今回の措置について、国家価格制定局の担当者は、「実利を追求するには、まず勤労者が自らの経済活動の実態を正確に把握しなければならぬ」と説明している。

これまで少なからず国家の負担でまかかってきた分を、「実勢価格」にしようということだ。例えば、これまで一キログラム当たり八〇ウォンで農民から買い上げ、八千ウォンで供給していたものを、四〇ウォンで買いあげ四四ウォンで販売する。国家は財政支出による負担をしない代わりに、給与を引き上げることによって、実勢価格に見合った生活費を保証することになる。

**人民生活向上へ** 金正日総書記は昨年十月三日、「強盛大国建設の要求にそって社会主義経済管理を改善・強化することについて」と題する労作で、社会主義的な原則を守りながら実利を生む経済管理方法への転換を示した。（月刊誌「イオ」二月号）

本紙平壤特派員が国家計画委員会の幹部から聞いた話によると、総書記の経済戦略が国家的な規模で推進され始めたのは二〇〇〇年末からだという。

▼経済司令部としての内閣の役割強化 ▼各経済指導機関への計画化権限の委譲  
▼工場や企業所の合理的組織と管理運営の改善 ▼生産の分化、専門化などがそれぞれ。こうした方針にのっとり、技術的に劣っていたり、旧式な生産工程を抱え採算の合わない企業所や工場が廃止された。一方で、各工場や企業所では現代技術を土台にした経営管理の合理化、効率化が進められてきた。

今回の一連の措置も、そういった脈絡から出てきたものといえる。

三月に開かれた最高人民会議第一〇期第五回会議で報告した洪成南総理は、「わが党と国家では昨年、社会主義社会の本性的要求に沿って、経済管理を改善強化するための画期的な措置を講じた。われわれは社会主義経済管理方法をウリ（われわれ）式に解決していくための事業を力強く推し進めながら、計画、財政、労働部門の事業体系や方法を改善し、

企業管理で独立採算制を正しく実施し、地方の創意創造性を高めるようにしなければならぬ」と述べた。この言葉から判断すると、今回実施されている改善策はすでに昨年設定されていたと判断できる。この実行過程において、工場や企業所は「収益に基づく評価」を受ける。国家の経済計画を実利保障の原則に基づいて滞りなく執行するためだ。

そのため企業所単位では「独立採算制」、国民単位では業績を上げるためより多く働くことが求められる。

働いた分に見合った分配を行うことは、労働者の働く意欲を高めることにもつながる。また、コメの買い上げ価格を八〇チヨンから四〇ウオンに引き上げたことで、農民の生産意欲も高まり、穀物生産の向上にもつながることが期待されている。

金正日総書記は、先ごろ訪朝したロシアのイワノフ外相と会談した際、この改善策について触れ、経済の姿を一新させ経済力を高め、人民生活を飛躍的に向上させるものと確信している、と語っている。

〔朝鮮時報〕八月九・二三日号より転載

## 人でありながら「道具」となっていないか

—「子会社は叫ぶ」を読む—

先日新聞の書評で、島本慈子著の「子会社は叫ぶ」——この国でいま、起きていることが紹介されていました。山崎豊子の「沈まぬ太陽」以来一気に読みました。著者はノンフィクションライターで豊富な取材力をもって、子会社で働く労働者の過酷な実態をすどく描いています。子会社に向向している、我が身とオーバラップする部分も多く、身に詰まされる思いで読みました。

本の帯封には「いま子会社を見れば日本の未来が見えてくる」とあり、第一章人間の使い捨て（空港）、第二章構造改革の陰で（目くらまし）、第三章社員、売ります（派遣子会社）、第四章NTT二極分解（大量転籍）、第五章先取りの未来（バス）、第六章イマジネーション（希望）で構成されています。交通運輸労働者である、自分にとって、バスの分社化がもたらす労働実態はけっして、西鉄だけの問題ではありません。大手民鉄のバスは、すでに分社化され賃金の切り下げをはじめ、労働条件の改悪が行われ職場の雰囲気が一変してしまつた状態にあります。

首切り合理化を発表すると、その企業の株価が上昇する異常な現実と、物言えば唇さびしの世の中で、声を出すことの勇気を失い、時代の流れであるからと、自分自身を無理やりに納得させている一人として、声の出せる職場と「鯛の団結」の必要性を強く感じています。

今年の二月から、需給調整規制の原則廃止と運賃規制の緩和等が実施されました。乗合バス事業においても規制緩和策が本格的に加速されることは必至であり、そこに働く労働者の生活実態はますます悪化するのには目に見えています。

資本の力が強大だからこそ、物を言える労働者を孤立させず、仲間を裏切らず、信頼を得る活動家が一人でも多く出ることによつて、声を出す労働者が一人でも増えることを期待したいと思います。

「子会社は叫ぶ」最後の一文を紹介し一読をすすめます。

「静かな行列に叫びはない。けれど、沈黙の陰で、人々がのみこんでいる思いが見えるだろうか。人でありながら道具として捨てられる痛みを想像する力が、私たちにあるだろうか。それがあれば、そのイマジネーションがまだあるとすれば、いま不気味なうちに崩れようとしているこの社会にも未来への展望が見える」

（群馬・T）

# 近年の社会主義論書籍から

近年出た、社会主義理論を考える上で有益と思う書籍を数点紹介します。

## 『二世紀社会主義への挑戦』

社会主義理論学会編、社会評論社、二〇〇一年、本体三六〇〇円

同学会編の前置『二〇世紀社会主義の意味を問う』を受け、今度はこれからの社会主義のあり方を一三人の論者が展望した論集です。私は、以前本誌で前置を評したとき、アソシエーション論と市場社会主義論との分岐が見られると述べましたが、この本ではその両者の志向の違いが一層広がっていると感じました。

アソシエーション論は、マルクスの未来社会展望を、国有集権経済ではなく、諸個人の協同組合的連合と解釈し、現実の協同組合・NPOなどの実践の中にその先取りを見いだす議論です。私自身もこれに属するものですが、前置と比べて本書ではこの議論がさらに着実に定着し、拡大していることがわかります。中でも、冒頭の田畑稔論文は、私の論文が好意的に解説されているから言うわけではないのですが、現実の一筋縄でいかなさをよくよく認識しつつ、逃げず、しかし開き直らず、地道に誠実に日々の生活世界を変えていくという姿勢がにじみ出たい論文です。

他方で、市場社会主義論は、ソ連東欧の教訓から思索を重ね、あるべき社会システムの青写真を彫刻する作業を進めています。これらの議論の中で特に面白かったのは、終わりの方で凌星光が山口勇と論争している議論でした。凌は、現実の日本も含む現代資本主義を、社会主義への移行期たる「社会資本主義」と規定し、山口からさんさん批判されているのですが、現実の中国の体制をもって「社会主義」と強弁する以上、このような議論に至ることは無理からぬことと思います。凌は、世界資本主義が「社会民主主義」的要素を強めていって、二二世紀には平和的に「世界社会主義」に移行すると論じています。その内実は「公共機関主導型市場経済」だそうです。公共機関の介入が強まることをもって社会主義的要素の拡大とみなしているわけです。その一方で山口から「民間非営利組織」セクターの拡大についての評価を尋ねられたことに対しては、全く答えがなく、そもそも問題意識が存在しないことが見て取れます。

ところでこの本で大きく感銘を受けたのは、真ん中に収録されている石堂清倫の講演録でした。戦争に至る時代を実際に経験した身から、戦争を止められなかった社会主義運動の限界を指摘しています。そしてそれは、古代の和魂漢才から近代の和魂洋才まで貫く、日本人が「母乳のように飲み込んだ」偏狭な愛国主義を脱却し得なかったことの批判にまで及びます。なお、軍部が全国津々浦々寒村に至るまで、目下の社会矛盾解決のため満蒙入植の必要性を説く時局講演会を行い、一年以上かけて世論工作したうえで満州事変を起こしたとの話は、実体験を踏まえているだけに衝撃的でした。

## 『近代市民社会と高度資本主義——ドイツ社会思想史研究』

久間清俊著、ミネルヴァ書房、二〇〇〇年、本体三五〇〇円

基本的にカウツキー再評価を志した本と言えます。著者はアダム・スミス、J・S・ミル、マルクス、ウエーバー等から近代市民社会論を抽出し、それを引き継いで社会主義を構想した者としてカウツキーを位置付けています。それとの対比で、レーニン主義の共

産党支配、中央集権的計画経済、民主主義的原則の軽視といった側面が、近代市民社会論を持たない点で批判されています。その点がスターリン体制の出現につながったというわけです。

レーニンの中に、対反革命戦争遂行上の便法と言ってすまされない、近代市民社会の原則への根源的無理解があることは、もはや学問的には定説と言っていると思えますが、しかしその点からする本書のカウツキー評価には異論があります。スミス、ミル、マルクスやそして（いくぶんスタルジックなニュアンスを伴って）ウェーバーに見て取れる近代市民社会論には、一九世紀には厳然と存在していた「個人」というものの基礎付けがありません。しかしカウツキーの近代市民社会論と著者がみなしている、民主主義や人権の重視の側面には、こういった「個人」というものの裏打ちが抜け落ちていくように思います。だからカウツキーの社会主義像も、やはり諸個人の協同組合的連合ではなくて、国有中央計画経済であることは間違いないのです。カウツキーの唯物史観理解からも同様の点を感じます。

結局レーニンもカウツキーも、二〇世紀の大ピラミッド組織の時代という現実を反映して自己の社会主義的展望を作り上げていたという点では共通なのであって、対等自立の個人から論じるマルクスら一九世紀の市民社会論とは共に断絶があると思います。

とは言え、スミスに始まる多くの重要な論者を丹念に検討した本書の業績は、高く評価すべきだと思います。また、これからの社会主義がスミス以来の市民社会論の論点を継承するものでなければならぬとの主張についても、現代の高度資本主義がもたらす新しい世界市民社会にこそ、その資本主義をのりこえていく希望があるのだとの見方についても、大いに賛同します。

### 『社会民主主義の源流』

保住敏彦著、世界書院、一九九二年、本体三九〇〇円

カウツキーが出たら次はベルンシュタインでしょう。昔カウツキーもベルンシュタインも勉強せずに社民批判をしておきながら、今になってカウツキーもベルンシュタインも勉強せずに社民を提唱している人も多いようですが、真面目に社会主義を考えるときには、二〇世紀冒頭の、レーニン、カウツキー、ベルンシュタイン、ルクセンブルク、バウアーといった論客をいずれも避けて通るわけにはいかならないと思います。

とはいえ私がベルンシュタインの本を読んだときには、そのあまりの俗論にあきれば、やっぱり読む価値なしと思ったものでした。しかし本書を読んでその理解は一面的だったことがわかりました。

本書は有名な修正主義論争を中心とする二〇世紀初頭の社会主義論の研究書ですが、主に取り上げられているのはベルンシュタインです。本書によれば、彼が修正主義論争を最初にしかけた動機は、当時のドイツ社民党のカウツキー指導部が、資本主義が遠くない将来崩壊するだろうとの予想のもとに、待機主義的な方針をとっていたことへの批判にあったとのこと。現実には下部党員が日常の改良主義的な実践に取り組んでいたのに、理論上指導部がそれをサポートできないというギャップがあったのです。

そこでベルンシュタインはその批判に乗り出したのが、論争が進むにつれて、様々に広がる論点への対応に追われ、ついには、元来体系的思考に向いていないのに、実に粗雑な体系書を作り上げるはめに陥った。もともとの問題意識は置き去りにされて。そこにベル

ンシュタインの悲劇があったと言うわけです。

結局党はベルンシュタインの修正主義を否定しますが、それは本当は執行部の権威に従ったものにすぎず、その後党は勝手にベルンシュタインを乗り越えて右傾化していきます。第一次大戦の時彼は戦争協力する社民党を出て反戦側にいたというところはご存じでしたでしょうか。

私はこれを読んで似たような事例を身近にたくさん思い出してしまいました。

私達は旧西欧社民の功績と限界を源流から立ち返って検討する必要があると思いますが、その限界を総括する時には、単に社民とソ連型の間を取ればいいというのではなく、旧社民が、組織というものの官僚主義的把握とか、国家後見主義(バターナリズム)といった点で、ボルシェビキと同根の悪しき本質を持っていたのではないかといいるところにまで思いをいたさざるを得ません。

### 『図解 社会経済学——資本主義とはどのような社会システムか』

大谷禎之介著、桜井書店、二〇〇一年、本体三〇〇〇円

当代随一のマルクス研究家の手になる、『資本論』にそつた伝統的なマルクス経済学の教科書の決定版です。これを超える教科書は以後決して現われなれないと思います。

この本のなによりの特長は、計二三五に及ぶ図です。私も図解には自信がある方ですが負けました。難解とされる議論を実にわかりやすくまとめています。図解で使う記号を統一させているところも評価できます。また、索引が別冊になっているところも、大変使いやすく工夫されていると思います。常に内容を要約した小見出しをつけているところも読みやすくいいです。

しかしさらに感心するのは、このようにわかりやすい叙述につとめているにもかかわらず、水準が決して落とされていないことです。過去学会で論争になった論点はたいい念頭において書かれているほどです。また、『資本論』のカバーする領域にはいる前に、人間社会一般の原理をおさえてあるところも評価できます。これによって、この本の通奏低音である「労働の二重性把握」など、人間社会に一般する原理とその体制特殊的な変容形態との関係を理解しやすくなっています。

(松尾 匡)

### 「左翼小児病」はどう読まれなければならないか

労働組合の「危機」 労働組合存亡の危機である。しかし労働組合は絶対になくならない。労働組合は資本と賃労働の階級対立という資本主義社会に内在する根本矛盾によっているからである。したがって、労働組合存亡の危機とは、「資本の労務副官」としてさらに存在しつづけるのか、「競争の排除」を第一の任務として労働者の団結を維持、さらには「搾取からの労働者階級の解放」を掲げて生き返らるかである。

資本は、したがって「労働組合不要論」には「与」みしない。労働組合をつうじ、あるいは労働組合に責任をもたせ、資本の搾取の貫徹、その効率的貫徹に意をつくす。それが、「職場の労使安定帯は、社会の安定帯」という総資本の考え方であり、日経連が結成以来追求し、やはり新経済団体の日本経済団体連合会(日本経団連)が追い求める道である。資本は労働者の中に「資本の労務副官」をそれなりの数で維持しておきたい。もし、これらの存在がゼロとなるとき、労資の矛盾は、ムキダシの階級対立としてあらわれ出でる。

だから、労働組合への職場の不信感の増大は、決して好ましいものではない。

資本にささやかな金銭や審議会での地位（政府審議会の委員となることは報酬と同時に講演料の価格に跳ね上がる。それだけではなく政府閣僚や経済四団体の長と同格の地位が与えられること）によって労働貴族意識を植えつけるのに役立っている。で買収され、彼らの年収は三百〜四百万が平均的労働者の賃金であることをすっかり忘れてしまう。他方、大企業の労働組合の労働組合員、活動家はかつての産業平和と繁栄の時代の酔いがさめず、無自覚なままに沈潜する。企業が成長、繁栄し、そのおこぼれをあずかっていた時代から脱却できないでいる。

その犠牲はこれまで子供たちの「荒れ」、「登校拒否」、若い労働者たちからは「働く場」が失われ、中高年労働者は「自殺」、「精神障害」というように、アメリカがアフガンの民をテロ醸成者として皆殺ししていると同じように、資本の搾取の犠牲者としてと殺されている。

労働組合は社会主義実現の「中心」 労働組合を本来の労働組合にどう立ち返らせるか。自覚した労働者一人ひとりの課題である。新社会労働委員会第二次検討資料は、①労働組合とは本来はいかなるものでなければならぬのか根本を踏まえ、②現状の労働組合運動のあり方が連合結成以来の歴史的総括から説明され、③自覚的労働者（つまり、社会主義を実現したいとする労働者）の任務を鮮明にし、④その任務を達成するため、自覚的労働者にとって何が重要かが「意識改革」のテーマで論じられている。

新社会党は七月大会で「社会主義綱領」を決定した。綱領は社会主義の実現を「平和革命」と定式化した。社会主義が具体的にどういう道をたどって実現されるかは、革命的情勢がいかなる姿をとって現れるか、その時が来るまでだれも予想することはできない。しかし、労働者階級が八〇%をはるかにこえ、「半労働者」（兼業農漁業家、小零細企業の家族従業者）を加えれば九〇%超が労働者階級に属する現在、労働組合が立派に再組織されることなくして、「平和革命」など夢物語にすぎない。

労働組合強化なくして革命はむろん、平和革命の実現はありえない。それだけに、今日労働組合強化のあり方が問われるのである。

レーニンの論述はつねに具体的 労働組合強化のあり方について、マルクス、エンゲルス、レーニンを少しばかりかじった自称「社会主義者」から、かならずもち出されるのが、レーニンの古典『共産主義内の「左翼主義」小児病』にある「革命家は反動的な労働組合のなかで活動すべきであるか？」（『レーニン全集』第三二巻、三二〜四一頁）である。

レーニンは、労働組合について多くは論じていない。一八九〇年代後半のロシア資本主義の勃興期、「工場で労働者から徴収される罰金にかなする法律の説明」（一八九五年）、「ソートン工場における革命がまだ具体的な課題でなかった時で、革命的マルクス主義の立場からのどちらかといえば啓蒙（けいもう）文である。

ロシアの政治情勢は一九〇五年の革命から社会主義革命（ブルジョア民主主義のてつてい）が日程に上がり、レーニンの記述は、「政論家」（革命家）として論じられる。とりわけ、ソビエトというプロレタリア権力の萌芽を見出してからはとくにそうである。全集第十巻に『革命の初段階、方向およびみとうし』との見出しをもつ一九〇五年末または一九〇六年初めに執筆とされるたつた二頁にすぎぬメモがある。このメモには労働者運動の重要性が端的に語られると同時に、このメモどりに十月革命（一九一七年）が進行した、そのレーニンの「構想力」（情勢分析、階級分析の鋭さ）には驚嘆する他ない。

その後レーニンが労働組合について強調するのは十月革命後、とりわけ外国からの干渉戦争、内戦に勝利し、プロレタリア独裁を名実ともに確立し、新経済政策（ネップ）に着手して移行のことだ。この論文と前後して、『労働組合について、現在の情勢について、トロツキーの誤りについて』（全集第三二巻）、『ふたたび労働組合について、現在の情勢について、トロツキーとプーハーリンの誤りについて』（同）がある。

レーニンの文を目にした者には誰にもわかるが、レーニンほど教条主義をきらった者はいない。マルクス・エンゲルスの理論は行動の指針と階級情勢を分析し、その時の党の任務について展開する。いわゆる『左翼小児病』はそうした文書である。

労働組合はふえつつけているのに ロシア革命、そしてソビエト権力はロシア一国にとどまらず、一九一〇年代後半からレーニンが生存した一九二四年まで国際労働者階級の中心課題となった。ロシアではプロレタリア独裁をうち固めるため生産が最大の課題となり、ヨーロッパ諸国は革命情勢となり、どうプロレタリア独裁の権力（社会主義革命）を実現するかが歴史的課題となったのである。

ロシアでは資本主義発展の遅れから労働組合における改良主義（労働貴族の層）は少なかった。ヨーロッパ労働運動との最大の相違である。この書でレーニンが強調したのは、労働組合はプロレタリア独裁実現のためのもっとも巨大な階級的、大衆的組織であり、労働組合と社会主義政党との融合なくして、プロレタリア独裁は実現しないということである。一九〇五年革命は労働組合にレーニンの党を根付かせた。この〇五年革命の教訓をロシアに一般化した。それでも一九一七年四月革命から十月革命直前まではボルシェビキは少数派だった。

この教訓をふまえ、レーニンはヨーロッパの共産主義者に今は革命情勢、労働組合員は膨脹しつづけているではないか。こんな時に労働組合の分裂を主張するのは愚の骨頂と痛烈に批判したのである。

（滝野 忠）

## 総対話と組織拡大基金が焦点

—全労連大会の特徴について—

三つの潮流 日本労働戦線は総評崩壊以降、三つの潮流に「分裂」した。第一の潮流は巨大民間労組が主導するユニオン連合であり、この潮流は労資協調を基本に、「要求、抵抗型労働運動は時代遅れ、今や参加型労働運動の時代」と、「参加・改革・提言」を総路線とする。第二の潮流は全教、自治労連といった公務員組合、それに医労連などが中心の共産党系の全労連である。全労連は「要求、たたかい」を前面に掲げる。しかし、国民的多数派形成が必要、そのためには「共同」だと、労働者独自のたたかいを「国民的支持のため」とかなぐり捨てる。その典型が「国鉄闘争」にたいする方針である。

連合は七百五十万、全労連は百四十万の組合員を擁する。これに比すれば数は少ないが、労働組合の基本は要求と抵抗と、職場からの労働運動を真正面にすえたたたかい続けているのが全労協である。全労協は国労を中心に、国鉄闘争を軸に団結したたかってきた。しかし、国労が基本路線を変更したことによって、いま重大な岐路にある。連合労働運動、国鉄闘争については誌面の多くを割いてきた。全労連の動向にふれたい。

三つの運動基調 全労連の特徴は大言壮語、空文句の羅列の一語につきる。全労連発足時、「連合労働運動との対決」をスローガンとしたが、今では連合との「共同」、政府審議会等への「参加」に力点がおかれ職場から賃労働と資本が対峙する姿勢は姿を消してしまっ

た。その典型がさきに述べた国鉄闘争にたいする優柔不断な方針である。

全労連は七月、二年ぶりに第二〇回大会を開いた。大会スローガン「雇用・くらし・いのちと平和を守り、政治の民主的転換に向け、壮大な共同の発展を」とする運動の基調は、(1)前大会で決定された「二一世紀初頭の目標と展望」の実現、(2)あらゆる社会勢力との国民的対話の追求、(3)結成十五年にふさわしい組織機能の強化を上げる。具体的にはこうである。

第一項では①最賃の改善、男女賃金格差の是正、パート均等待遇、②解雇規制、百六十七万人雇用創出実現、過労死・労災職業病・サービス残業根絶、③NTT闘争の前進、国鉄闘争の解決、公務員労働者の労働基本権の確立、④社会保障の維持・改善、大増税阻止、⑤憲法改悪・戦争参加阻止を二年間の具体的要求とする。

第二項では勤労諸階層の諸組織のみならず、「業者・経済団体」との「国民的対話」が掲げられる。業者・経済団体が「同列」に並べられている。小零細企業の業者・経済団体もあれば、巨大独占資本の業者・経済団体もある。この区別すらせず「国民的対話」、「共同」を強調するところに全労連の現状が如実に示される。

第三項では中労委や最賃審議会など労働組合代表が参加する政府審議会委員への「参加」が強調されていることである。

総対話運動、組織基調 運動方針では(1)国民春闘と賃金闘争の活性化、(2)リストラ「合理化」反対、雇用の充実、(3)国民の共通要求実現をめざす運動、(4)平和と民主主義・政治の民主的転換、(5)総対話と共同、組織の拡大・強化が目指される。

全労連にとっても組織減少は深刻だ。結成から十万人減り、その速度はさらにはやまっている。労働組合の力は「数」。したがって、組織拡大が最重要の課題とされ、「五百万全労連、八百地域組織達成」を目標に、「組織拡大基金の創設」が提案される。組織拡大の対象は①単産、②未組織労働者の組織化、③臨時、パート、派遣労働者とし、当面、一万二千単位組合(二千六百四十四増)、六百地域労連(百三十増)、二百万全労連(六十万増)をめざすため、「組織拡大基金」をつくり、四十七都道府県に「全労連オルグ」を配置するとする。

「基金」は①一般会計からの繰入金(三千万円)、②一億円カンパ、③単産・地方組織からの「特別会費」で構成する。労働組合財政は火の車。賛否両論の議論の末「制度の発足を確認し、走りながら知恵を出し合う」と決定された。

組織拡大のためには、賃上げ闘争、反「合理化」闘争をどうたたかうかが最大の課題となる。賃上げ闘争では「大幅賃上げ、ベア要求」は、「全労連内部の意見が一致しなくなった」と、これを放棄。①底上げ要求を統一目標とする、②全国一律最低賃金制、③パート均等待遇めざし時給一千元が提起されている。この方針にたいする不満はきわめて強く、これまで以上の論議があった。集約では、「額を決めるルール、基準をどう考えるのか、議論していきたい」となった。

全労連にとって、リストラ「合理化」反対のたたかいは今やお題目だ。それにとつて代わって強調されているのが「総対話と共同」という国民運動で、連合をふくむあらゆる労組、社会勢力との共同を目的意識的に追求することである。たとえば、連合に「日本最大のナショナルセンター」として労働者の要求前進、国民の利益擁護、悪政からの転換、労組の社会的地位を高めるための役割を發揮することを期待する」というようである。

◇書評◇

澤野義一氏の新刊『永世中立と非武装平和憲法』を薦める

骨太の大書 本紙八三五号の巻頭言で軍隊のない「非武装永世中立の国」中米のコスタリカ訪問記を寄せた憲法学者の澤野義一・大阪経済法科大学法学部教授が、これまでの研究を集大成した決定版とも言える著書を発表した。大阪経済法科大学出版部よりこの四月に著した『永世中立と非武装平和憲法』。

田畑忍氏の非武装永世中立論を發展させた研究者として学会でも自他ともに認める氏ならではの本格的な研究書。先に著した『非武装中立と平和保障』（青木書店、一九九七年）が啓発の書であるとするなら、これは著者が近年研究誌に発表してきた論文を集大成し、大幅に手を加えた「学術的体裁」をとった論文集。私もこの丸々一ヶ月間、この頑丈な表紙のついたA五版三五八頁にわたる分厚い本を、どこに行くにも持ち歩いてようやく読み終えたが、慣れない法律の文章と取っ組み合い、とにかく大変なエネルギーを費やしたという感じだ。そして何かとても充実した学習が出来、幸せな感じにもなった。

「護憲の魂」しかし著者の真の狙いは、単に学者の書齋での研究のための研究書ではない。「憲法学者の田畑の非武装永世中立論に、理論性と実証性を与え、さらに実践的に活用できるようにしようとするものである」（はしがき）とあるように、今国会内外で大きく争われている有事立法制定策動や憲法調査会による日本国憲法九条改悪の動向への渾身からの闘いなのである。

「男の子が生まれたとき、『ああ、この子は軍隊にとられる心配がないんだ』と思える幸せは、世界の女性の願いでしょう。」（コスタリカの故フィゲレス元大統領の妻カレンさん、朝日新聞〇二・二・二八）というような願いをこの地上に現に実現せんとする意志である。

私と大学時代の同窓生であった著者は、私のようないかげんな「活動家」とは違い、実に温厚で大人しいまじめな一生懸命勉強をする学生であった。その彼が今、憲法や有事立法問題の講演で引っぱりだことなると、北海道から九州まで大小さまざまな集会・講演会・学習会に東奔西走している。聴衆も労働者・市民・学生や研究者・弁護士など様々である。彼は、「運動」に関しても実に慎重で、熟慮に熟慮を重ねての判断であった。学生時代の彼しか知らない者が、今の彼を想像できるだろうか。彼のどこにあの分厚い大書を完成させ、全国・全世界を（コスタリカ訪問でその後訪日もされた国際法学者・国際反核法律家協会副会長カルロス・バルガス氏から「この本の英訳はないのか」、「非武装永世中立論の共同研究をしよう」と言われたとのこと）飛び回る「護憲の魂」が秘められていたのだろうか。

エネルギーの源 私が事務局を担当させていただいている「憲法を生かす会滋賀」も九九年春に結成したが、澤野氏に会長を引き受けてもらったおかげで、全国紙の地方版でも取り組みを大きくいつも報道してもらっている。感謝に耐えない。

「夫が決断した軍備廃止は、確かにだれもしたことのない実験でした。大事なことは夢を持ち続け、実現の努力を継続することです」

お土産にくれた木製人形の胸には、スペイン語でたった一言、「やれるんだ」とある（同前・朝日新聞）。

この本を一ヶ月かかって読んで一つ感じたことは、「マルクスがこう言っているからこうだ」そしてレーニンが、というくだけりが一箇所もなかったことである。澤野氏は今や

「私たち」の運動上の全国的にも理論的中心メンバーの堂々たる中心人物である。しかし、私たちが「運動」に参加し始めた七十年代前半は、「体制間矛盾」が世界の基本矛盾であり、社会党左派系組織が大前進し、今にして思うと誤った、あやしげな無内容なマルクス・レーニンの訓古学もかなり寄生できた。そういった流れがいつせいを風靡しているとき、同志社大学の田畑忍教授の非武装永世中立論を学ぶとは、「孤立」などという域を通り越したものであった。

同時多発テロの直後、米下院議会で武力行使を含む強大な権限を大統領に与えることに、たった一人で反対したバーバラ・リーさんは、捜査機関に大きな権限を与える反テロ愛国法にも反対し、「たった一人でも反対する勇氣の源」を質問され、「別に勇氣があるわけではありません。憲法を読み直し、それに沿った行動をしているだけです」と答えた（朝日新聞〇二・一・一六）というが、澤野義一君のエネルギーの源は、バーバラ・リーさんも高く評価する日本国憲法自体に潜んでいるのだろうか（坂本龍一編『非戦』。ここでリーさんのいう「憲法」とはもちろん米合衆国憲法のこと）。

この本のサブタイトルには、「非武装永世中立論研究序説」とある。著者がますます「理論と実践」に磨きをかけ、続編を発表されることを願ってやまない。

（大阪経済法科大学出版部発行、四五〇〇円十税）（稲村 守）

## 年間十六万円の賃下げ勧告

政治に緊張感・緊迫感、さらには危機感がまったくなくなってしまう。噴出する政治家、企業、官僚の汚職と腐敗と墮落。汚れた者同士が「処分」を乱発し合う。これでは緊張感、緊迫感、危機感がなくなるのは当たり前だ。国民は今では政財界、そして学、ジャーナリズムがたよりにならないことを知り尽くし、小泉、真紀子といった己れの夢を託する政治家にも裏切られつづけ、虚無の状況にある。それは、この十年間、政党支持なし層が五〇％を前後する状況に示される。そしてその背後には石原待望論も。

議会制民主主義は搾取をおおいかくす最大の政治形態だ。一九九〇年代半ばの小選挙区制導入、さらには労働組合幹部が資本の「経営者層」にすっかり組み込まれ、支配階級にも「体制変革」への危機意識がなくなった。とりわけ、国民の九〇％ちかくを占める労働者階級が政治意見を述べる場が封殺されてしまったことである。支配階級は民主党はわれわれのお友だち、だれが党首になろうと労働者階級を搾取するという政治体制に変化はない。共産党には要注意だが、社民党を永らえさせておくことによって、「反体制勢力」を分断できる、と考える。

しかし、こうした日本にも激動の時代が近づいているかに感ぜられる。「かれん誅求」が全国民に襲いかかっていることだ。その一つに公務員攻撃がある。

公務労働者攻撃が露骨となってきた。国家・自治体労働者には国家に忠誠を求める公務員制度改悪、教育労働者には「管理と締めつけ」である。ここまでとあきれはてるのが、東京都が都立校にタイムカードを導入するとの動きが始まったことである。

賃金切り下げ攻撃もまたすさまじくなってきた。人事院は八月八日、人勸史上はじめて平均二・〇三％、七千七百七十円のマイナス給与改定勧告をおこなった。内容は二点である。まず賃金についてだ。官民較差は七千七百七十円（マイナス二・〇三％）として、（一）本俸六千六百二十七円（一・六％）引き下げ、（二）扶養手当については①配偶者への支給月額二千円引き下げ（一万六千円から一万四千円）、②子等のうち三人め以降の支

給月額二千円引き上げ（三千円から五千円）、③一時金の支給月額〇・〇五ヶ月削減し四・六五ヶ月とするというものだ。

この他、新聞紙上ではあまり報じられていないが、（1）地域における公務員給与のあり方、（2）公務員給与制度の基本的見直し、を付していることがある。

そのポイントは――

（1）各地域に勤務する公務員の給与水準について、その地域の民間給与をより反映していく、と公務員賃金の切り下げが企図されていることだ。そして、このため民間給与のよりの確実な実態把握をおこなうこと、さらに俸給制度や地域関連手当等の諸手当のあり方について抜本的に見直すとしている。

（2）公務員給与制度では能力・実績主義の強化がうたわれる。

公務員攻撃がここまでと、身の毛がよだつのが、この勧告にすべての大新聞がそれではまだ足りない、退職金も切り下げよとドラ声を上げている現実である。

## ◇ 読者からのおたより ◇

「通信」で運動提案 野党の力不足を補う勢力として、旬刊が中心になって世論の怒りを結集して日常生活の不安を解消する運動を起こしましょう。先の国会で国民生活を脅かす医療費三割増額。八月二日、毎日新聞一面トップに年金給付額引き下げ等々、国民生活が脅かされています。旬刊が中心になって、自衛隊予算を削減して国民生活に廻す運動を提案したら。ホームレスの救済、失業者の無収入者の生活保障、介護保険の全国一律の政策など、自衛隊の聖域予算の解消、米軍に対する思いやり予算の全面停止など、憲法で保障されている最低限の国民生活を守るために、小泉内閣に強く求める運動を提起します。

編集部より 「提案に感謝。当面は国鉄闘争、労働運動強化に集中です。」

「社会通信No.八三九」 私達の課題は何か、個々の闘いと全体の統一、前進のために、職場・地域で「団結」づくりの中で、国鉄闘争の闘いへと連帯し、中小民間の闘い、合併しない地方自治体、行革に反対しつづけている、公務員や自治体労働者の闘い、民営化に反対しつづける、国鉄・電々・郵政労働者の闘い、教育基本法の改悪と闘っている教育労働者・等々を始めとして、医療と年金、増税の改悪に反対している勤労者や国民、医療労働者、社会保険労働者等々あらゆる国民各層が、さらに国労闘争団の闘いに連帯しはじめる。そして大きなうねりとなり、小泉内閣はぶつぶぶ！そして、次の闘いははじまる！

（佐賀・W）

支援の仲間へ感謝 先日高知に伺い県職労病院局労組の交流集会で報告させていただきました。その時、同行して頂いた県職労山崎副委員長には、私たち以上に国鉄闘争を知りつくしていただいていたのではと思うほどで、私の報告より、山崎さんの方が分り易かつたのではなどと思うほどでした。全国に私たちと共に闘って下さる仲間がいることをあらためて実感し、力強い思いです。筋の通らない組合員への個別オルグが行われたり、東日本本部から訳の分からない情報（紙）が来たりと、何でもありで必死になっている国労本部が、たびたび情けない思いです。様々不安はありますが、動揺せずやっつけていきたい。

（国労音威子府闘争団・C子）

編集部より 支援の輪は着実にひろがろうとしています。さらにながらばつて！

日の丸掲揚 議会終了後の全員協議会では議会議場へ「日の丸を掲げる」提案がされ、「他の議会でも掲げているので賛成」「役場入り口に掲げているので必要ない」。私を入れた二人は「過去の侵略戦争に日の丸が使われてきたので反対」という議論の中から賛成一〇、反対八で議会議場会場の日の丸を掲げることになりました。

（千葉・I）

編集部より こうして「法制化」の意図が明らかになっていく。

カストロ演説 社会通信No.八四〇号の十一、十二頁「キューバでは、国民が政府、権力である」カストロ議長の前演説を読んだ。現代社会の本質を、これほど明確に簡潔に示した文書を見たことがない。難しい経済や政治や運動の図書よりも、現代社会の本質がよく理解できた。

（神奈川・K）

編集部より カストロの演説はレーニンの演説とよく似ています。学者ぶらず、理論家ぶらず、さわめて実践的、階級的のです。

のさばる自衛隊 七月九日浜大樹において、今年も自衛隊の上陸訓練が行われた。訓練内容も年々拡大しており、L C A C（輸送用オーバークラフト）による揚陸作戦が五回も行われ、またパラシ

ユート降下訓練まで行った。迷彩服着用での民間機乗り込みなど、自衛隊そのものを国民に慣れさせ、そばにいるのが当たり前になる状況を作ろうとしている。

**岩井宅訪問** 八月十一日に熱海の岩井さん宅を訪問することができました。いろいろお話ができて、お悔やみというより楽しい一時でした。楽しい岩井夫人でしたので、またお訪ねしたいと思いましたが。

(鹿兒島・K)

**編集部より** 私なんかたいへん近く、かつお世話になっていながら失礼ばかり。  
**普通切手二七券種販売中止** 郵便料金値上げの伏線か。七月二四日、国会で郵政関連法案が可決され、いよいよ来年四月一日、「日本郵政公社」が発足する。労働者には新集配システムなどの合理化が襲いかかる一方、利用者にもコスト削減の下に様々なサービス切り下げが行われている。郵政事業庁が八月二日発表した普通切手二円、四円、四十円、六十円など三十券種の販売中止もその顕著な例である。現在の普通切手五十七券種の半分以上を対象とする郵政史上例のない大整理だ。第三種の六十円切手も対象にしていることにみられるように、これは公社化以降の料金改定(値上げ)を見据えた措置であることはまちがいない。

(郵政労働者・N)

**編集部より** 低額切手購入は今でも容易じゃありません。

**イラク攻撃** ブッシュ政権のイラク侵略は、どうやら決定的なようです。今年の三月から五月くらいまでは、インド・パキスタン間の緊張の激化を前に、「どう対応していったらいいのか分からない」という混乱が見られましたが、六月からは現代世界における唯一の超大国として毅然として行動する、と意志決定したようです。「侵略」(インベイション)という用語はニューヨーク・タイムズやタイムズ誌で使われているものです。ブッシュのおごりぶりを彼らは「帝国主義」といった言葉で非難しています。

(東京・H)

**編集部より** 世界史は十九世紀後半から二十世紀前半に回帰しているように見えます。すさまじい独占資本主義間の競争による物価の下落。その中で市場競争戦です。

**パンフレット** 音威子府ではパンフレットをつくったそうです。そういえばパンフレットなかったんだと、いまさらながら気づきました。このことを今まで観た仲間はどう伝えるかですよね。

(大分・O)

**編集部より** 音威子府闘争団のパンフレット、すばらしい出来です。

**ようがんばってるなあ** 残暑お見舞い申し上げます。この三日間は秋を感じさせる天候でしたが、また明日から暑くなるようです。さて『社会通信』での稲村さんの「めでたさも中くらないオラが夏」、長い間の闘いをよく頑張られたものだと思います。稲村さんの昔のエピソード。二十年前、全通京都市区内の北部四支部(中丹、舞鶴、丹後など)の青年婦人交流集會に講師として依頼しました。一泊二日で毎年開催し(現在も続いています)。一日目の夜九時から十時頃舞鶴の会場へ電話が入りました。「大変申し訳ない、福知山駅まで迎えに来てほしい」とのこと。本来なら綾部で乗り換えて、舞鶴へ来る予定でしたが、汽車の中でビールを飲んで眠ってしまった通過してしまつたとのことでした。会場から一時間三十分ほど車で走って福知山駅へ行きました。会場へもどつた時は夜中の二時頃になっていましたでしょうか。

このことがあつてから、稲村さんに「禁酒する」と何年間か一滴も口にされませんでした。(今はどうか知りません)。私の稲村さんに対する印象はそれが一番大きなものです。しかしよう頑張つとつてやなあ、といつも感心しています。同じ号に載っていた「音威子府のパンフ」五冊送つて下さい。それではまだ暑いですがボチボチと!

(郵政労働者・A)

**編集部より** 稲村さんにAさんからおたよりいただいている。「こんな内容」とお話しし、掲載してもらつてかまいませんというご返事をいただきました。一生に一二度、あるんですよ。  
**奮闘を決意** 先日は、私たち家族に熱い・暑い「夢と感動」の甲子園を目の当たりにさせていただいたお心遣い、ありがとうございます。旭川工業高校コンピも、九月の秋季大会では、一年生一八名中、二人だけがレギュラーとして試合に出られます。国鉄闘争も「四党合意」の亡霊には負けられませんが、子供たちの頑張りに負けられないように奮闘する決意を新たにしています。(音威子府・S)

**編集部より** 先日、上京された団長から甲子園に行かれた杉山浩平君、千葉慎平君、そしてスキークロスカントリで全国の頂点に立った吉田圭伸君らの奮闘ぶりを伺いました。すごいですね。

## 編集部からのたより

▽残暑がすごい! だけど「読書の秋」も間近と、これまで投稿していただきながら、編集箱に入っていた「書評」を載せました。おもしろい本、みんなに推めたい本をぜひご紹介下さい。

▽私の読書はもっぱら古典。中国の老荘、ギリシャ・ローマ、今はレーニンです。じつに面白い! 階級闘争のなんたるかを再学習中です。

▽「人らしく」パンフ大好評。四国の「人らしく」タオルにも協力したい。お力を。